

# Midnight Press

2010.7.31



## 「midnight poetry lounge」レポート 3

2010年7月30日、midnight poetry lounge vol.3「今、吉行理恵の詩の魅力 —記憶されるべき女性詩人— 左川ちか、長澤延子、山本陽子などを交えて」が、神保町の東京堂書店6Fの会議室で開かれた。講師は、詩人中村文昭氏、そして中村氏が主宰するえこし会の、中右史子〔のりこ〕さん、クリハラ冉〔なみ〕さん、チョルモンさんの4人の方々。

はじめに、自己紹介を兼ねて3人のパネラーが詩の朗読をした。中右

さんは、この詩を書いた経験がえこし会とつながっているとして、自作の「遺言〔ナンセンス〕」を朗読。そして、モンゴルからの留学生であり、中村文昭教授の指導のもとに博士論文（「モンゴルの近代詩の誕生と未来——サイチングの日本留学期における近代詩の創出と課題」）を書きあげたチョルモンさんは自作の「帰途」を朗読。近代女性詩を研究するクリハラさんは、今日取り上げる詩人たちを語る前提として、近代女性詩人の祖としての与謝野晶子の「そぞろごと」、永瀬清子の「野薔薇のとげなど」を朗読した。



(左から／クリハラ冉氏 中村文昭氏 中右史子氏 チョルモン氏)



中右史子氏

そして、中村氏が、誰もが詩を書けるベースをつくった与謝野晶子、その晶子を受けて平明なことばで現実に根をおろした詩を書いた永瀬清子という、女性詩の道を開いたふたりの詩人を押さえた上で、これから詩の二極について考えていきたいと語り始めた。ひとつは、ことばの意味を極限まで引き伸ばす思想系の詩。もうひとつは、意味することを無化する暗喩系の詩。そこで、まず暗喩系の詩人として、吉行理恵の「海の精」「流れ星」を中右さんが朗読した後、参加者全員で朗読。続いて、思想系の山本陽子の「よき・の・し」「あかり あかり」をクリハラさんが朗読した後、全員で朗読。



クリハラ冉氏

中村氏は、理恵の詩を、ひとつひとつのことばの意味は了解されるが、その詩は、意味を伝えようとしていない、意味を殺そうとしている、暗喩系の詩であると分析。一方、山本陽子の詩は、意味にアクセントをかけている詩だが、この意味はどこをめざしているのか、終わり近くにある「死のとりでをのりこえよ」ということばの前で、読むものはたえずむしかないものとなっている。

ことばによって意味を抹殺する暗喩詩と、ことばによって意味を極限化する思想詩。ふたつの極のイメージをつかんだところで、クリハラさんが、与謝野晶子の詩に見られる女性詩の4つの流れについて解説。ひとつは、短歌的発想から生まれる感情軸、暗喩軸の系。もうひとつは、

俳句的発想から生まれる実感軸、思想軸の系。そして、暗喩軸の例として、「春月」。感情軸の例として、「みだれ髪」。実感軸の例として、「詩についての願い」。思想軸の例として、「君死にたまうことなかれ」の4篇を朗読。中村氏が、短歌的発想とは、意味に重きを置かないものであり、俳句的発想とは、意味に重きを置くものであり、この発想は現在の詩や散文にもなお生きていると付言した。

続いて、暗喩詩の例として、左川ちかの「会話」を中右さんが朗読、思想詩の例として長澤延子の「別離」をクリハラさんが朗読。それぞれその後、参加者が朗読した。左川ちかにおいては、内面に測鉛していく詩人の暗喩を、長澤においては、世界の果てまで往った詩人の思想を、それぞれ読むことができるだろう。（なお、当日紹介された詩は別記のとおりです。ただし、山本陽子の「あかり あかり」という詩にはパソコン上で表示できない文字があるので、長詩「よき・の・し」の冒頭部分と最終部分とを掲載しています）

休憩後の後半では、まずチョルモンさんが博士論文で取り上げた、内モンゴル近代文学史上最初の詩人であるサイチングの詩「窓」を朗読した。現在、内モンゴルは中国自治区としてあるが、かつてモンゴル独立運動を指導した徳王が日本に送った留学生のひとりがサイチングであった。遊牧民の伝統生活を送ってきたモンゴルには「窓」というもの、「窓」ということば（概念）がなかったが、そこにサイチングが「光の

差し込むところ」という意味をもつ「窓」というタイトルの詩を書いたことの意味は大きかった。また、この詩は、各連の第1行と第5行のルフランを下げて詩行に段差をつけたり、感嘆符「！」を使ったことなどにも、それまでのモンゴル詩には見られなかった新しきがあり、モンゴル詩の新しい時代を切り開くものであったという。その後、チョルモンさんはモンゴルの民謡「ノーンジャヤ」をアカペラで歌った。遠いところに嫁いでいったノーンジャヤという少女を慕う歌ということであったが、お酒が入っていたならば、さらに深く沁みたであろうと思わせるチョルモンさんの声であった。



チョルモン氏



中村文昭氏

続いて、「詩の現在」について、「谷川俊太郎問題」というテーマで中村氏が語り始めた。それをかんたんにまとめると、いまや「現代詩」というジャンルをつくった観のある谷川俊太郎は、かつて、あの「鳥羽」という詩で、詩人への不信、詩への不信、ことばへの不信を表明した。

そして、詩にメッセージを求めない、だれにでもわかることばで詩を書くとした谷川俊太郎が、暗喩詩とはならない、思想詩とはならない、独自の詩を書く、その秘密は何かと問うものであった。熱く語り続ける中村氏のことばは、詩についてさらに考え続けることへと誘うものであり、当日取り上げられた吉行理恵、山本陽子、左川ちか、長澤延子の詩をあらためて読んでみようと思いつきながら帰途についた。

### えこし会

1998年春、江古田で発会。詩人中村文昭を中心に、「他者に学び、他者と出会う」を基本理念として、詩集読書会、自作合評会などをおこなう。詩、文学を中心に様々な芸術、生活に学び、かつ自己表現に励む。

### 当日紹介された詩

#### 海の精 吉行理恵

死児をおぶった背中を  
物干しざおにぶら下げます と  
百合が蠟燭を燈す気配が  
海の方から伝わって来ます

## 流れ星

猫は  
明るいき  
窓枠に 肘をつき  
部屋のなかを 見守っている

目の中で  
綾取りを繰り返す 姉妹

縁者たちにかこまれて  
お婆さんはうわごとを言う  
「うたたねしながら 死にたいわ」

その瞬間、星が流れた

●吉行理恵〈よしゆき りえ〉（一九三九～二〇〇六）東京都市ヶ谷  
生れ。ダダイスト作家の父エイスケ、美容師の母あぐりの次女（本名・  
理恵子）。兄は作家の淳之介、姉は女優の和子。高校生の頃より立原道

造、中原中也、萩原朔太郎の詩を愛読。早大文学部入学、この頃初めて  
詩を書く。昭和三十八年、第一詩集『青い部屋』（中央公論事業出版、  
「附記」吉行淳之介）刊行。女性詩人8人と詩誌「うゝえが」創刊。「歴  
程」同人。昭和四十年第二詩集『幻影』（河出書房新社）、昭和四十二  
年第三詩集『夢のなかで』（晶文社刊）刊行。昭和四十五年、処女小説  
「記憶のなかに」（「群像」）発表。昭和五十六年、小説「小さな貴婦  
人」で芥川賞受賞。平成七年、「新潮」十二月号に兄淳之介の勧めで書  
いた最後の小説「靖国通り」発表。二〇〇六年、甲状腺ガンのため六十  
六歳で死去。没後、母あぐり（現一〇三歳）の編纂による『吉行理恵レ  
クイエム 青い部屋』（二〇〇七・文園社）刊行。

## 會話 左川ちか

--重いリズムの下積になつてゐた季節のために神の手はあげられる  
だらう。起伏する波の這ひ出して来る沿線は鹽の花が咲いてゐる。すべ  
てのものの生命の律動を渴望する古風な鍵盤はそのほこりだらけな指  
で太陽の熱した時間を待つてゐる。

--夢は夢見る者にだけ残せ。草の間で陽炎はその緑色の觸毛をなび  
かせ、毀れ易い影を守つてゐる。また、マドリガルの紫の煙は空をくも  
り硝子にする。

--木の芽の破れる音がする。大きな歡喜の甘美なる果實。人の網膜を叩く歩調のながれ。

--眞暗な墓石の下ですでに大地の一部となり喪失せる限りない色彩が現實と花苑を亂す時刻を知りたいのだ。

--

--不滅の深淵をころがりながら幾度も目覺めるものに鬨聲となり、その音が私を生み、その光が私を射る。この天の饗宴を迎へるべくホテルのロビイはサフランで埋められてゐる。

●左川ちか〈さがわ ちか〉(一九一一～一九三六)北海道余市町生れ。本名川崎愛(ちか)。生来虚弱で、四歳まで歩行がままならず、眼も良くなかった。小樽高女入学、この頃、ちかの異父兄・川崎昇の親友、伊藤整と出会う。昭和三年、上京。兄や整を通じ詩人らと交流。百田宗治の知遇を得る。昭和四年、「文芸レビュー」にジョイスやウルフ等の翻訳発表を開始。ちか十九歳の時「ヴァリエテ」に発表した「昆虫」が最初の詩作とされる。北園克衛はちかの詩を一読し賞賛、「白紙」に誘う。その後「マダム ブランシュ」「椎の木」「詩と詩論」等に詩を発表。昭和七年、椎の木社から訳詩集『室楽』(J・ジョイス)刊行。昭和八年北園克衛と「ESPRIT」創刊。胃癌に冒され、昭和十一年一月、二十四歳で夭折した。没後、伊藤整の手により『左川ちか詩集』(昭和十一年、昭森社・発行森谷均)刊行。「椎の木」追悼号で西脇順三郎は

「非常に女性でありながら理知的に透明な気品のある思考があの方の詩をよく生命づけたものである」と文章を寄せた。ちかは昭和5年から十一年までの約五年間に、八十数篇の詩を創作発表した。

### 別離 長澤延子

“別離の時とはまことにある……朝が来たら 友よ  
君等は僕の名を忘れて立ち去るだろう” 原口統三

友よ

私が死んだからとて墓参りなんかに来ないでくれ

花を供えたり涙を流したりして

私の深い眠りを動揺させないでくれ

私の墓は何の係累もない丘の上に立て

せめて空気だけは清浄にしておいてもらいたいのだ

旅人の訪れもまばらな

高い山の上に--

私の墓はひとつ立ち

名も知らない高山花に包まれ

ふれることもない深雪におゝわれる  
たゞ冬になったときだけ眼をさまそう

ちぎれそうに吹きすさぶ  
風の平手打に誘われて  
めざめた魂が高原を走りまわるのだ

友よ  
私が死んだからとて  
悲しんだり哀れんだりすることは無用なのだ  
私にひとかけらの友情らしいものでも  
抱いてくれるのなら  
それはたゞ私を忘れて立ち去ることだ

世の中に別れを告げた私が  
生きる人々の内に  
なお映像としてとゞまることは堪えられない

私の墓を  
幾度び幾度び過ぎる春秋の中で  
人々の歩みを

やがては  
忘られた勝鬨さえ聞くことが出来るだろう

友よ  
その時こそ私の魂は歓喜に満ち  
その時こそ私が死ぬ時なのだ  
墓の中の魂は春にめざめ  
再びの別れを  
その墓に告げる時なのだ

友よ その時こそ忘却の中で  
大きな旗を  
大空に向って打ちふっつけてくれ  
その逞ましい腕のつづく限り  
私に向って打ちふっつけてくれ

友よ  
別離の時とはまことにある  
朝が来たら――  
君等は私の名を忘れて立ち去るだろう

●長澤延子〈ながさわ のぶこ〉（一九三二～一九四九）群馬県桐生市生れ。長澤竹次・タツの次女。四歳で母親と死別。小学生時代、四歳年上の兄の蔵書を片っ端から読む。小学校では六年間級長をつとめる。十二歳で、伯父の家へ移り住み事実上の養女となる。桐生高等女学校入学、この頃より詩を書き始める。バスケット部、映画部、文芸部、新聞部、社会部に所属。壁新聞「ホノホ」創刊。原口統三『二十歳のエチュード』を読み強い衝撃をうける。青年共産同盟に加盟。一九四九年三月、群馬県立桐生高等女学校卒業。同年五月三十一日、三冊の詩ノート「十五歳の詩集より」「十六歳の詩集より」「十七歳の詩集より」と、「手記Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」とを親友高村瑛子に遺し、十七歳で服毒自殺。一九六五年、延子十七回忌の年、長澤延子遺稿詩集『海』（私家版、発行・長澤竹次）刊行。兄・弘夫と高村瑛子ら友人たちによる共同編集。この遺稿集には、岡本潤、滝口雅子、田中冬二、埴谷雄高、真壁仁、松永伍一ほか多くの詩人・文学者から感想が寄せられた。

よき・の・し 山本陽子

（冒頭部分から）

あらゆる建築をうちこわし

いかなることばを  
あとにのこすな、  
すべてをもえつき、  
もやしつくせ、  
全けき白さをひっさらって

死のとりでをひとこえよ

よきをひだにふくみのみ  
さまざまなる夜をはらめ、

死のこちらには死がひそみ  
種のうちには絞られた精気、  
濾過した夜に  
血清があった

（最終部分から）

朝の立売りには昨日という、  
いまわの過去が巻きパンとともにやってきて  
さらばということばをいくらかだけはかせ、  
夜の冷気までに死はちかんしていた  
決して決して  
あとをおとすな、  
あとに、

全けき白さをひっさらって

死のとりでをのりこえよ

もし、ということばはらむなら、

決して決して

ならばとは

いうな、

もしをもしものものからやかかれよ

●山本陽子〈やまもと ようこ〉（一九四三～一九八四）東京都世田谷区生れ。父栄寿、母昌枝の次女。絵を描くのが好きな子供だった。一九五八年女子美大附属高校に首席で入学。一九六一年、日大芸術学部映画学科入学。映画はルイス・ブニュエルが好きだったという。音楽では新ウィーン楽派のアントン・ウェーベルンが好きだった。学費の関係で二年で日芸を中退。六六年雑誌「あぼりあ」創刊に参加。評論「神の孔は深淵の穴」を発表。以後、約十年の間に約十八編の詩を発表し、後の十年弱は沈黙していた。七七年、生前唯一の詩集『青春～くらがり（1969…）』（吟遊社）刊行。八〇年頃、安田生命ビルの掃除婦の仕事に就く。八四年八月、肝硬変のため四十一歳で死去。陽子の部屋には、「あぼりあ」と約五十枚の遺稿、大量の不可解なメモやパステルで描かれた自画像の他、文庫本が数冊遺されていた。

窓 サイチンガ

チョルモン（潮洛蒙）訳

流してくれ、窓よ！

憂鬱な心を照らしてくれる黎明の光を

偉大なる希望を燃やす輝かしき太陽の光を

清新な知恵を悟らす清らかな空気を

流してくれ、我が家へ。

薫らせてくれ、窓よ！

暖かい太陽の温みに育まれる青草の香りを

澄んだ月の光に微笑む美しい花々の芳香を

清徹な露に清められた新しい朝の息吹を

薫らせてくれ、我が家へ。

さえぎってくれ、窓よ！

冷たい当たりで身を冷やす夜中の寒気を

儂い息で虚しくさせる埃まみれの風を

朧な霧に心を混迷させる夜の暗闇を

さえぎってくれ、我が家から。

聞かせてくれ、窓よ！  
彩りの声で歓喜をさえずる小鳥の調べを  
頗る悦びに愉快地に啼く愛しい虫たちのハーモニーを  
美しい微笑みで歌う若き娘の歌声を  
聞かせてくれ、我が家へ。

- **サイチンガ**（一九一四～一九七三。一九四七年以降ナ・サインチョクトと改名）は、内モンゴル近代詩（文学）の創始者である詩人、作家。一九三七年四月から、当時の内モンゴル独立運動指導者徳王の官費留学生として東京善隣高等商業学校、東洋大学専門部倫理教育科などに五年近く留学。留学中に身に付けた近代語と近代思想を機に多彩な創作活動を行い、内モンゴル近代文学史上最初の詩集である『心の友』（一九四一年）を東京で謄写版で出版した。一九四五年の日本敗戦と共に徳王政府が崩壊すると、彼は今度モンゴル人民共和国（現在のモンゴル国、通称“外モンゴル”）に留学し、二年間の滞在中マルクス・レーニン主義、共産主義の洗礼を受ける。一九四九年中華人民共和国成立後は、中国におけるモンゴル民族の代表詩人として文化行政の要職に次々と就くが、文化大革命では日本やモンゴル人民共和国のスパイと断罪され、心身共に大きな被害を受け、一九七三年胃癌のため上海の病院で無念の死を遂げた。詩「窓」は上述した彼の第一詩集『心の友』に収録された氏の代表作の一つである。

## 次回予告



### **midnight poetry lounge vol.4**

「詩のこれから、これからの詩」

出演 **清水哲男 文月悠光**

日時 **2010年10月30日（土）2時～5時**

場所 **神田神保町・東京堂書店6F会議室（ドトールの隣）**

JR御茶ノ水駅徒歩8分

会費 **1500円**

予約・問い合わせ先

[poetrylounge2010@gmail.com](mailto:poetrylounge2010@gmail.com)

（ミッドナイト・プレス、中村）

070-5579-1564

**produced by midnightpress**